

平安京右京(西寺)跡・唐橋遺跡発掘調査現地公開資料

2016年6月11日

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所在地：京都市唐橋門脇町23-14番地

調査面積：約168㎡(長濱製作所の増築工事に伴う発掘調査)

調査期間：2016年5月9日～2016年6月17日(予定)

調査地の概要

調査地は平安京の西寺跡にあたります。西寺は平安遷都(794)の時に、東寺とともに平安京内に造られた官営の寺院です。東寺・西寺は平安京の南辺、九条大路に面し、平安京の中央を南北に通された朱雀大路南端の羅城門を挟んで対称の位置に配置されました。ところが、現在まで法灯を保っている東寺とは対照的に、西寺は早い時期から衰退したと考えられています。

西寺は、これまでの発掘調査によって、おおよその伽藍配置が判明しており、境内の南側半分の主要伽藍跡は国の史跡に指定されています。北側半分には、僧侶の日常生活を支える施設として、寺の運営を行う役所やそこに勤める人達の生活の場、花や作物を作る畑などがありました。調査地は、このような付属施設の一つ、太衆院にあたっていると推定されています。

調査は南北に分けて行い、1区(北半)は調査を終了し、現在は2区(南半)を調査しています。

調査成果

弥生時代の遺構(唐橋遺跡) 2基の方形周溝墓ほうけいしゅうこうぼが見つかりました。そのうち1基は一辺11m程度と考えられます。方形周溝墓とは、弥生時代の代表的な墓です。周囲に方形の溝(周溝)を掘り、その土で内側を盛り上げ、そこに穴(墓壙)を掘り、遺体をいれた棺を安置します。今回の調査では、墳丘が削られていたため埋葬の様子は確認できませんでしたが、溝からは墓に供えられたと思われる弥生土器が出土しました。

平安時代の遺構(西寺跡) 2区で建物跡が2棟見つかりました。いずれも調査地外へとのびているので規模は定かではありませんが、建物1は梁間2間×桁行2間以上、東側に庇ひさしが付く建物で、建物2は梁間2間の建物で東へ延びると推定されます。また、出土した瓦や土器から、平安時代中期の建物と考えられます。

まとめ

これまで西寺跡は数次にわたって発掘調査が行われてきましたが、太衆院推定地から建物跡を初めて検出できたのは、大きな成果です。さらに、唐橋遺跡で弥生時代の墓が見つかり、当地で弥生時代の人々が暮らしていたことが明らかになりました。

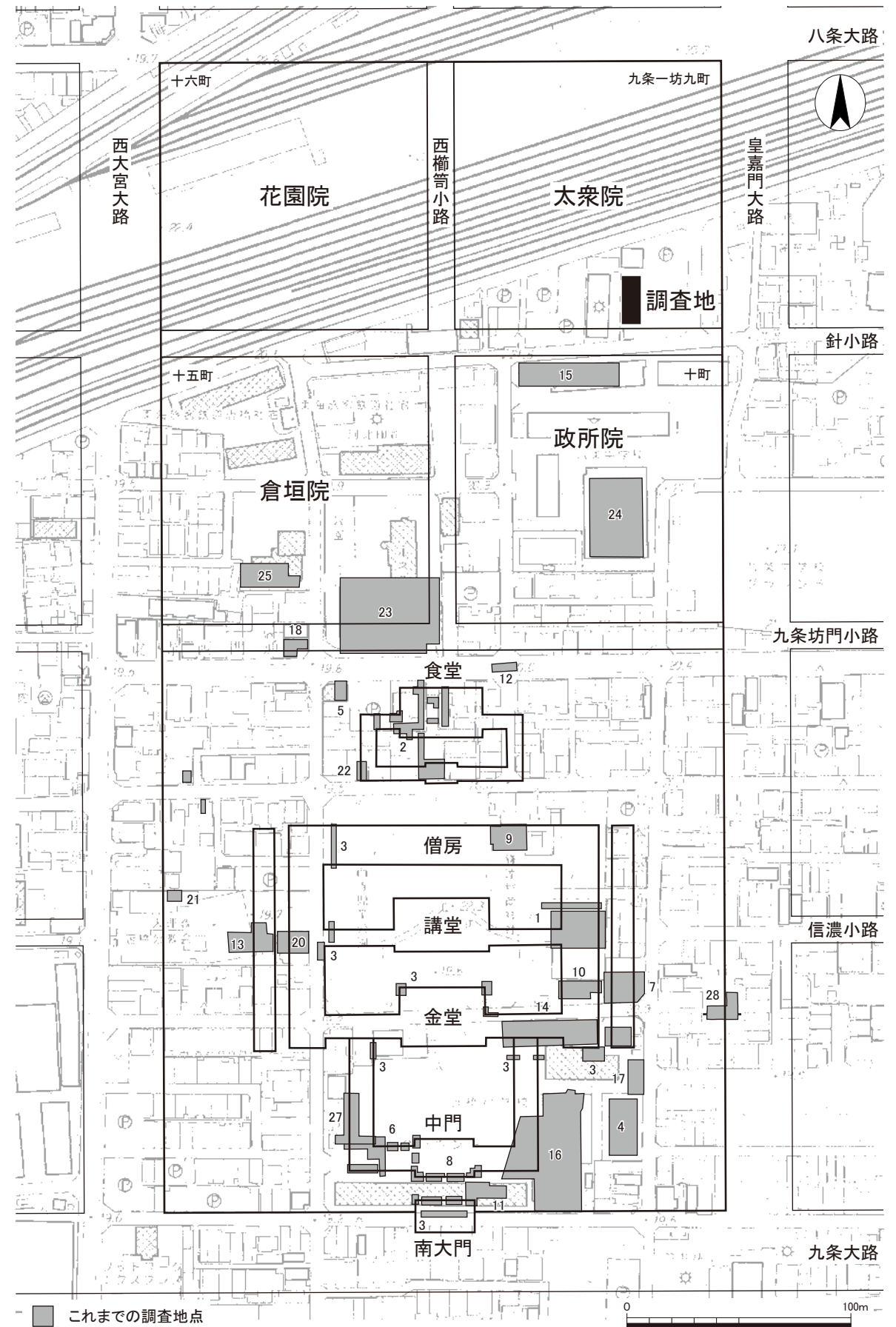


図1 調査地および近隣の調査位置図(1:2,500)

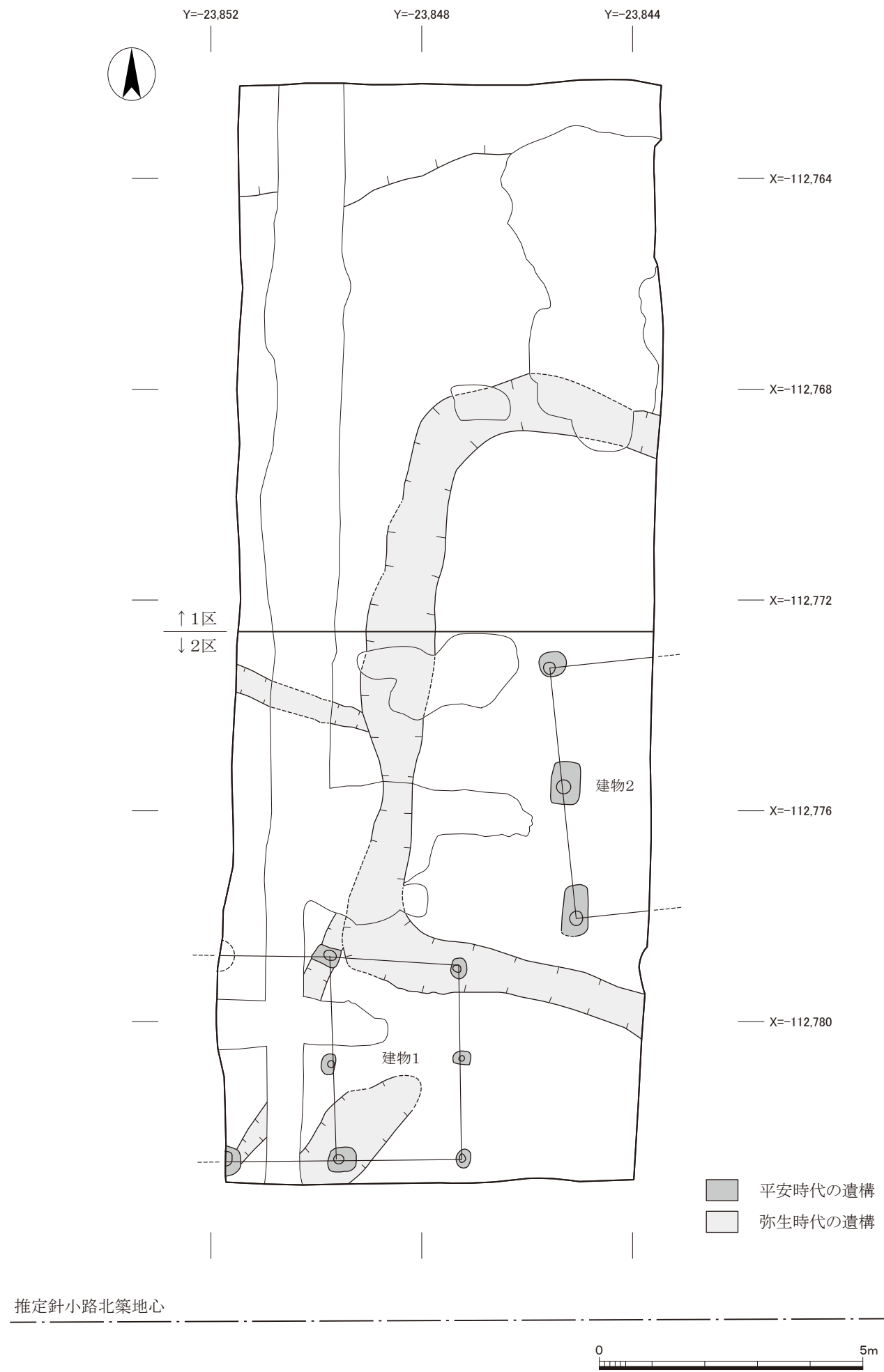


図2 遺構平面図(1:100)

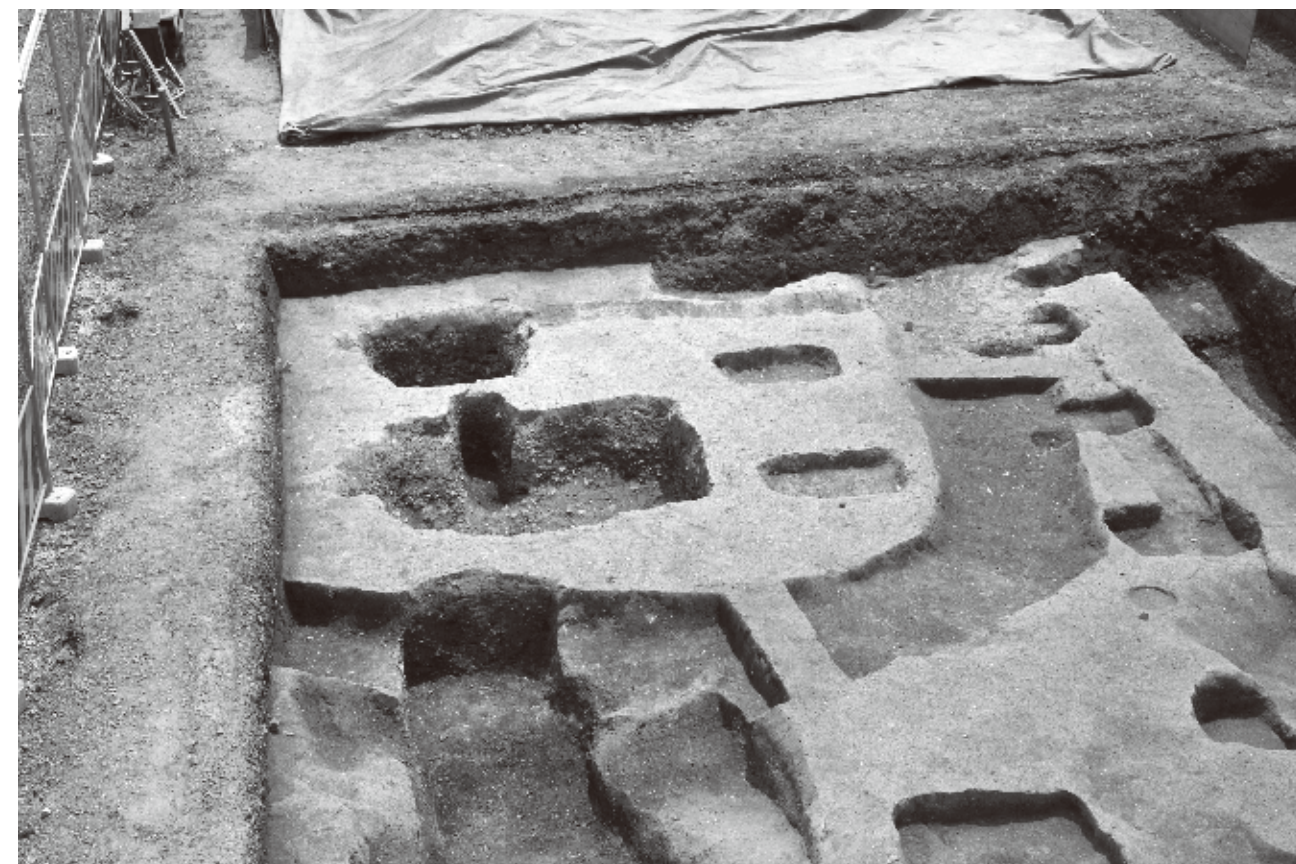


写真1 1区方形周溝墓検出状況(北東から)

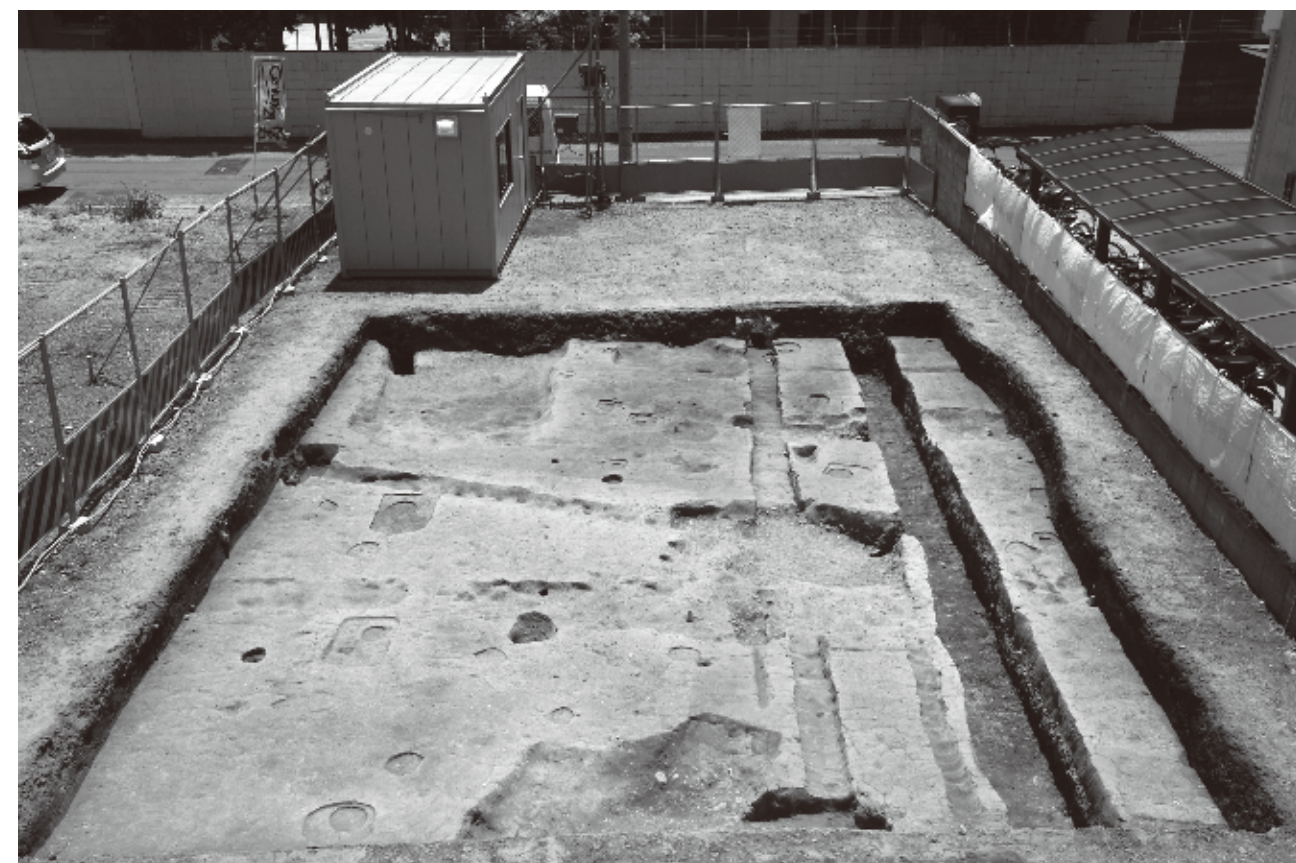


写真2 2区平安時代全景(北から)